

6月12日『新聞読んで語ろう会』例会報告

参加者6名で行いました。内、『風』会員以外の方2名です。

① 今回は例会を12日に行っておりますが、その前日11日に辺野古の埋め立てに新たな展開があったというニュースが入り（添付2.）、急きよその記事からの語り合いから始めました。

記事は、

6月5日「土砂搬出のペース上がる 辺野古新基地建設」

同7日「防衛局が許可なく護岸構造を変更 辺野古新基地工事、公有水面埋立法違反か」

同7日「俳優・津嘉山正種さん「戦争につながる基地建設は絶対に反対」 辺野古座り込みに参加」

同8日「辺野古K8護岸での土砂陸揚げ 防衛相「問題ない」目的外使用にはあたらないとの見解 沖縄県は行政指導する構え」

同11日「辺野古新基地建設 土砂陸揚げに新たな護岸使用 国、工事加速へ」

同11日「玉城知事「暴挙以外の何ものでもない」 辺野古新基地建設で新護岸からの土砂陸揚げに」

同12日「沖縄県、防衛局を行政指導 当初計画になかった辺野古K8護岸から土砂陸揚げ」

同12日「沖縄県が「違法」と指摘しているのに…2日連続で辺野古K8護岸から土砂陸揚げ」

以上すべて琉球新報電子版より

同12日「土砂の陸揚げ別護岸で開始」

同12日「辺野古反対に前後九行脚 玉置知事最初は東京でシンポ 札幌開催も調整」

以上2記事は北海道新聞

辺野古新基地の土砂搬入は既成事実化され、何を言っても止まらない政府の強行に、ともすれば諦めのような絶望感に襲われてしまう事に、自戒（Y）を込め沖縄で進む日本政府の強行を「忘れていないぞ！表明」のための提出です。

沖縄の新聞では、こうして毎日のように辺野古の事、基地問題の事が記事になっているけれど、国民の多くはこの問題から情動的に隔離され、くだらない「ニュースにもならないニュース」に時間を奪われているような気がしています。

という事で、以上の10記事を包括しての語り合いでした。

辺野古埋め立て工事における政府の今回のやり方は、県の条例を無視し、何よりも先に行われた県民投票での『辺野古新基地建設反対という県民の意思』（民意）を全く無視したかたちで進められている、その無視の度合いがますますエスカレートして来ている事を表わしています。

こうした政府のやり方に対して、「沖縄県として、何か法的な対抗措置のような事を行なっているのだろうか？」という疑問が出ました。（県が違法だと防衛局に伝え行政指導をしている事から、今後法的な措置へと発展する事もあるだろうという意見も出ました）

このような疑問の延長上に出て来たのは、司法の立ち位置についてのさらなる疑問（そして不安）でした。いくら法的な訴えをしても、結局「国が勝つ」司法という図式が思いうかび、今回もまた司法のあり方、三権分

立は機能しているのか?という話題に続いて行きました。

もうこの国は法治国家ではないのではないかとさえ思える状況ですが、実際は形式的には法律の手順を踏んで行政を行っているような、ちゃんとしたつじつま合わせが、完璧とまでは言えなくてもそれらしく行っているように見せています。

《立法府である国会は、憲法の枠からはみ出さない範囲の中で法律を作り、政府や地方自治体はその法律に基づいて行政を行う、当たり前の手順のようですが、例えば立法府である国会の議員の大半が行政府の長(内閣総理大臣)が率いる政党の議員で占められていたならば、行政の主張が反映しやすい法律ばかりが成立するという現象が起き、これでは法治国家の仮面をかぶった独裁的政治になりかねない。

さらに、こうした「法を楯にした国家権力行使」を監視する役割を担うはずの司法までもが、政府によって実質的にコントロールされるようになってしまえば、三権分立は名ばかりで有体の独裁国家となってしまう》

が、現在の日本の状態はまさにこのような事になりつつあるのではないかと懸念されます。

『法治国家』という言葉は、あたかも崇高な国家を表わしているかのように見えます。でもその法治国家の中にある『法』というものは様々な姿を持っているのかも知れません。

何だか訳の分からない屁理屈で、国民の思いから遠く離れた理解や解釈によって、国家権力がその行使を合法化するために法律があるのだなんて事では、それは法治国家の仮面をかぶったただの強権国家でしかなくなってしまふ。

法律によって国民が安心して暮らせるのか、それともビクビクして暮らすことになるのか、法治国家というのはそのどちらの法律を持っているのかという事になるのでしょうか。

沖縄の人びとは、今まで法律の壁に阻まれながらビクビクと(あるいはイライラと、もしくは憤まんやるかたなく)生きてきたのではないかと、それは沖縄が法治国家の中にあるという姿ではないようです。

そしてこれは、本当は沖縄だけの話ではない。日本全体が同じ状況(法治国家じゃない状態)の中にいるのではないかとこの自覚が必要になっているのではないかと思わせられます。

(さて、この報告文を書いている途中になりますが、16日に「どさんこアンチョビーズの(沖縄現地体験旅行)報告会」を聞いてきましたが、やはり沖縄の人々は僕たちが思っている何倍もの苦しみや辛さ、悲しみを味わいながら今日に至っているという事が伝わって来ました)

(さらに、『総務省の第三者機関「国地方係争処理委員会」は17日の会合で、県の審査申し出を却下すると決めた』というニュースが17日午後のどうしん電子版に入りました。東京新聞18日朝刊記事とも合わせ(詳細は添付3.))

という事で、何はともあれですが、やられてもやられても諦めないで戦っている沖縄の人びとに対して、最低限僕たちも「今沖縄で何が起きているのか」を現地発信の記事などを通してではありますが、「見ていますよ」という事を、例会で確認したかったという思いです。

② この沖縄という、地理的には遠い場所の出来事ではあるけれど、同じ日本の中での出来事、それが今自分の周りでも起きている事としてとらえられる市民がもっと多くなる必要があるのだろうという意見から、次の記事「アンダークラス」という本の紹介記事（[前回より再添付4.](#)）へと話題を進めました。

この、本の紹介記事だけではアンダークラスという意味が今一つはっきり分かりにくかったこともあり、本の筆者が『現代の理論』15号に投稿したのも添付します。（[添付5.](#)）

（雑誌『現代の理論』は、ネット配信の雑誌（無料）<http://www.gendainoriron.jp/>）

また本の筆者が、アンダークラスについて考察する土台となるデータは「2015年SSM調査による」と書かれていますが、この調査がどういうものなのかが分かるものも添付します。（[添付6.](#)）

アンダークラスについて書かれた本の紹介記事（添付4.）の最後のところに、

『自分を不幸だと感じているアンダークラスの大部分は、どの政党を支持することもなく、そもそも政党に関心をもっていない。言いかえれば、具体的な平和主義や環境問題など「政治問題」を語れば、アンダークラスはそっぽを向く』

と書かれていて、この部分が大きく引っかかるところとなりました。

より多くの市民が政治に関心を持つ➡関心をもって政治や社会を見れば、現在の政治のおかしなところに気が付くはず➡そうすれば選挙に行って投票をする意義、必要性も感じるだろう

こういう流れを僕たちは想定して、街に出てスタンディングなどで「投票に行こう」と呼びかけたり、現在の政府の（行政の）おかしなところ（専守防衛を捨てようとしたり、原発再稼働を無理やりしたり、民意を無視して基地建設を進めたり、大金を払って役に立つのかもよく分からない軍備を進めようとしていたり、等々）を市民に訴えたりしてきたと思います。

しかし、選挙をするたびに投票率が下がって来ている現実、（たまに注目してくれる人に癒されながら）呼びかけても呼びかけても避けるように通り過ぎて行く人々が多かったりするその現状の中で、どうすれば良いのかがなかなか分からないままで来たような気がします。

このアンダークラスという概念が、本の筆者やそれを書評した人の言い分を肯定的に受け止めるとなると、僕たちはよほどしっかりとアンダークラスの人々を理解する必要があるのではないかと感じます。

僕（Y）が思うには、アンダークラスの人々が政治的な話、行動に対してそっぽを向くという心理は分かるような気がする。

その人数がいくら増えても、その中で低賃金労働、悪条件の労働環境のなかでさらに競争にさらされて、そもそも団結するという気力も持てない。

あるいは「政治のことなどどうでもいい」という気持ちに落とし込まれている（そういう個人個人が分断して行く社会の構造がある。企業の使い捨て労働の標的になっている）

生活するのがやっとか、それ以下になるかのぎりぎりのところで、「よけいなことなど考えられるか！」

そういう人たちが、政治にそっぽを向いている。本当は社会に一番怒りをぶつけなければならないはずの人々の気力がもうズタズタになっているのではないだろうかと思います。

投票率が上がれば野党が有利という事が『ただの神話』ではないとすれば、今増えつつあるというこのアンダークラスの人々と「一緒に戦える」という必要性がますます高くなって来るのではないだろうか？と感じます。

ただこうした事を書きながら、ふと思う事は、選挙に勝つためにアンダークラスの人々の政治参加を促すなんて目的と動機が反転しているような気がする。

アンダークラスと称される階層がそもそもあってはならない、同じ人権を持つ人間として、皆が人間らしく生きることが大事なんだという事を忘れてはならなかったのだなあと反省しております。

③ 語り合いは、残り時間を使って再び沖縄関連で、前回からの持ち越し記事、翁長前知事の息子さん、雅治さんへのインタビュー記事『父に続き政治家となった彼は、何を感じているのか。「沖縄保守」への思を聞く』を題材にしました。（添付7.）

沖縄の保守とは何か？そして北海道の保守本流の政治家とは？さらにまた選挙の話に戻ってリベラル保守という人々と共闘して安倍政治を終わらせなければならないのではないか？そういうリベラル保守の人は誰なの？

等々、時間いっぱいまでの語り合いでした。

以上、連絡係 安井

次回の例会は、6月26日（水）18:30より、いつものエルプラザの2階会議コーナーです